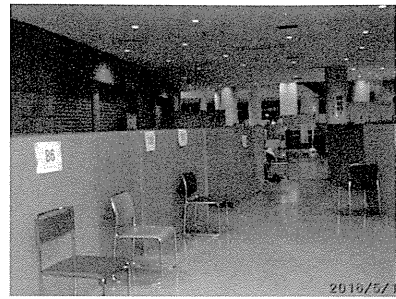


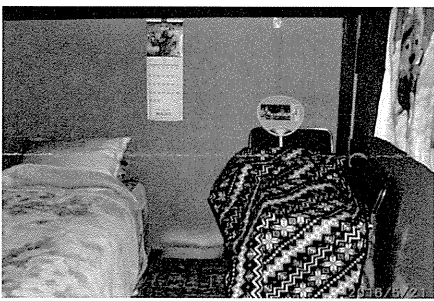
四月十四日午後九時二十六分、それは宮崎の兄との電話の最中であつた。左手に持った受話器が体ごと大きく揺れ、異常な地響きがした。次の瞬間「地震！」と、大声をあげ、受話器を乱暴に置いて椅子の上にあつた座布団を二枚頭に載せて食卓の下に潜り込んだ。

パッと電気が切れ真暗な中、ゴォー、ガタガタ、ガタガタといつまでも続く揺れ、なかなか止まらない揺れに恐怖を感じた。「神様、どうかこの揺れを止めて下さい。私の数々の罪を懺悔します。どうかお赦して下さい」と何度も叫ぶように唱えていた。それでも止まらず、その間の長いこと、長いこと。今まで経験したことがない激しいものであつた。



避難所内部
ダンボールで仕切られている

日の地震と同じ、いやそれ以上に大きく感じる余震（本震）が起きたのだ。私たちは大きな建物に居ても床に寝ており地面の揺れを直に感じてその凄さに驚いていた。しかしここに居る限り命は大丈夫だと思つた。皆は眠れないままに「ここでこれ位揺れるんだから外は凄いいね」「凄いいね。きつと酷いことだろうね」等々話していた。夜中に響く携帯電話の地震警報が震度7の事実を告げる。その時、わあつと何やら玄関付近が騒がしくなる。聞けば「津波警報」が出されたとかで次々と多くの人が車で押し寄せ、フロアは瞬く間に満杯の様相を呈した。一階だけでは足りず二階の観客席周りの廊下にも続々と人々が昇っていく。見に行つたところ前夜泊めてもつたSさんの息子さん一家



個人の部屋
ダンボールベッドは腰が痛い

が入り無事を確認すると「水を確保して」「ブレーカーを下ろして。他の人にも伝えて」と、アドヴァイスしてくれた。それで少し冷静になる。懐中の電灯を手に急ぎバスタブに水を入れ、ブレーカーを下ろす。すると、お隣のAさんが「外に出た方がいいですよ」と声をかけて下さり、携帯電話だけ持って飛び出した。すると近所の方々が十人程集まつていた。そこでも何度か余震があつて道路にへばりつくようにして塊（かたま）つて、難を避けた。

そこへ一台の車が到着。お向かいの一人暮らしの男性Sさんの息子さんが父親を心配して迎えに来たとのこと。「私の工場は御船（みふね）にあるけどもうメチャクチャです。ドーンと下から押し上げられてドーンと落とされて恐ろしかったです。道路は段差だらけで車の底をドンドン打ちつけながら来ました」。自宅は私の住む熊本市南区にあるが、とりあえず父親の家

に出会う。家も安全ではないから避難してきたとのこと。車が見るみる広い駐車場一杯になる。中に入れないで車中泊の人も多数。一気に千人以上の人が溢れた。それなのに断水でトイレの水が流れない。しかし、ここにはプールに水があつた。それをポンプで汲みだしスタップは夜中じゅうバケツに水を小分けしてくれた。トイレに水を流すため一人一人バケツの水を持ってトイレに入るためである。一挙に増えた避難者がトイレに列をつくと百人近くになる。車椅子の人や高齢者は本当に大変だつた。皆スタップに「ありがとう」「ご苦労さん」と、言いながらバケツを受け取つた。

次の日ころから自衛隊の炊き出しが始まつて、御飯受け取りに並ぶようになった。高齢者や足の不自由な人にとっては大変な仕事だつたが、代わりを受け取ってくれる人もいた。

私達は偶発的にできたコミュニティで日々を共に暮らすことになった。そこでお互いを思いやる助け合いが生まれ、かつてはあつたが久しく忘れていた相互扶助の心が復

活したような感があつた。そして、教区からの支援第二弾が入り、山本尚生さんが姿を見せてくれ、手作りのケーキやパン・おにぎり等を周りの人達に配ることが出来た。おいしいケーキは人の心を和ませるに十分だつた。

コミュニティの中に知的障がいのある青年を連れた母親がいた。仮に彼をB君としておこう。

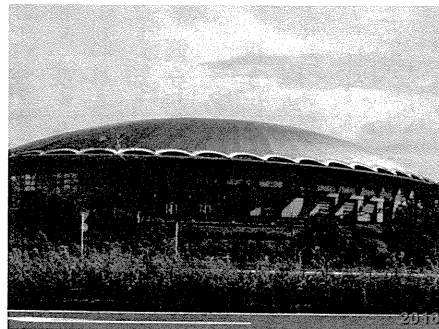
B君は夜中に時々大声を上げていた。だが皆何も言わずに黙認していた。彼もストレスで頭が一杯になっていたのだろう。

皆各々のストレスを抱えている中、次第に自我が出てくるようになった。B君の大声で睡眠不足になる人も出てきた。B君親子に対して人権を無視した発言をする人もいた

に直行したそうである。父親を車に乗せ、私の方を振り返つて「おばちゃんも一人だから家に来ませんか」と、誘つてくれた。息子さん宅は新しい建物でがっちりしているのが安心だと思つた。

ご家族とリビングで雑魚寝したのだが、ひっきりなしに余震がきて一睡も出来なかつた。次の日の十五日の朝、帰宅して家の周囲を見ると大きな亀裂もなく傾いてもなかつた。

内部は本が落ち茶碗類は割れて散乱していたが家具は倒れることなくやや動いていた。



避難所になったアクアドーム

が、それは間違っていると私が説得役になつて調整したりもした。障がいの者の立場になつて考え、意見を言ってくれるカウンセラーみたいな人が避難所に居てほしいと思つた。早速行政のスタッフに申し込む。しかしそれは結果、弟さんに引き取つて貰うという排除のような形になり残念であつた。

色々な人がいろいろな背景を持ち、皆慰めを求めていること、少しの慰めも嬉しく受け止められることが今回の避難生活で本当によく分かつた。前震から十日目、直方キリスト教会から田中さん、烏田さん、君原さんが支援に駆けつけて下さり、こまごました食品などが届けられた。第三弾の支援である。

避難して二週間近くになると廊下やフロアに居る人達とも顔見知りになり挨拶したりおしゃべりし合うようになった。私は出来るだけ館内を見回つて高齢者に声をかけをするように心がけた。

「大丈夫ですか。困つたことないですか」などなど。なかにはかわいい赤ちゃんもいて、いつも笑顔を振り撒いてくれ苦難の中、ふと安らげる

ひとときもあつた。館内でのろんな人達と話し合うと家が半壊以上壊れて住めない人、断水が続いて生活できない人など気の毒な人が多くおられることが分かつた。又、酸素吸入をしながら避難している人、その人を介護している人など、皆大変な事情を抱えながら悲観せずに一生懸命この状況に耐えていた。私の場合は一部損壊で停電・断水も復旧したが、自宅で一人暮らしのは余震が続く中怖くて避難を続けていた。私のように帰宅するのが怖い人も結構いたようである。

しかし、もう大丈夫だと帰宅する人、他の避難所が閉鎖されて移ってくる人と出入りは日々変動していた。私は二ヶ月になろうとしていた六月十一日に避難所を後にしていた。

この苦難のなか九州教区の働きは目覚ましく信徒だけでなく被災者に大きな慰めと勇気を与えてくれた。どんな苦しい時でも神はそばにいて下さること、信徒の絆は強く結びあれていることを実感し、深い感謝の日々が過ごせたことを嬉しく思いたい。

情報も入らないまま避難することを決意して準備を始める。隣家のAさんご夫妻に協力を頂いて二食分の弁当と毛布を持参してアクアドームに向かう。アクアドームは団体やNHKのフィギュアスケート大会が開催された水泳施設である。我が家から車で五分位の所にある、ドームの名の通り円くて安定感のある建物である。私が到着した時は、会議室AとBを合わせた部屋に三家族、フロアに二家族ぐらいいしかなかった。私は長机の下にブルーシートを敷きその上に毛布を敷いて寝るスペースを確保した。会議室にはテレビが設置してあり、前日の地震が震度7であつたこと、益城、西原、南阿蘇などの正視できない被害の状況を伝えていた。避難したアクアドームは指定避難施設ではなかつたので、水、米などの備蓄はなく何の配給もなかつた。私はAさんの奥さんが作つて下さつたお弁当を有難く戴いた。断水・停電でどうすればよいか悩むなか、十五日午後九州教区久留米聖公会から待望の支援第一弾が来てくれたのだ。部屋の中は次第に避難者が増え、二十

余名程になつていた。大きなポリタンクの水を二個、重いのに両手に提げて柴本登志男さん、そして熊本聖三一教会の山崎司祭が現れた時、本当に救われた。有難いと思つた。あちこちから連絡が入り、「水・おにぎり・パン」等お願ひしたがその通りの物が目の前に現れ、部屋中の皆がびっくりした。私は九州教区がすぐ動いてくれ困難な私達が手を差し伸べてくれたことがとても嬉しかった。そして、周囲の人達にお配りできたことが心から幸せで誇らしかつた。

皆、口々に「ありがとう」「ありがとうございます」と、言われたが、「私がさしあげるのではありません。神様に感謝して下さい」と、さらっと言うことができた。

「教会がこんな支援をしてることをテレビや新聞でもっと宣伝したらいいでしょ」と、言う人もいたが、「いえ、教会は右の手で施したことは左手にも知らせないという方針ですから」と、これ又すらすらと言え自分の驚いていた。そして避難第一夜の十六日の午前一時二十四分、実に恐ろしいことに十四

苦難から学んでいこう

避難生活を体験して

熊本聖三一教会
グレース 平岡加久子

四月十四日午後九時二十六分、それは宮崎の兄との電話の最中であつた。左手に持った受話器が体ごと大きく揺れ、異常な地響きがした。次の瞬間「地震！」と、大声をあげ、受話器を乱暴に置いて椅子の上にあつた座布団を二枚頭に載せて食卓の下に潜り込んだ。

パッと電気が切れ真暗な中、ゴォー、ガタガタ、ガタガタといつまでも続く揺れ、なかなか止まらない揺れに恐怖を感じた。「神様、どうかこの揺れを止めて下さい。私の数々の罪を懺悔します。どうかお赦して下さい」と何度も叫ぶように唱えていた。それでも止まらず、その間の長いこと、長いこと。今まで経験したことがない激しいものであつた。

暗闇の中で何か一つピカーッと光るものがあり不気味さが募つたが、後で気づくと床に落ちた携帯電話の光だつた。ようやく大きな揺れが止まると息子たちから電話

が入り無事を確認すると「水を確保して」「ブレーカーを下ろして。他の人にも伝えて」と、アドヴァイスしてくれた。それで少し冷静になる。懐中の電灯を手に急ぎバスタブに水を入れ、ブレーカーを下ろす。すると、お隣のAさんが「外に出た方がいいですよ」と声をかけて下さり、携帯電話だけ持って飛び出した。すると近所の方々が十人程集まつていた。そこでも何度か余震があつて道路にへばりつくようにして塊（かたま）つて、難を避けた。

そこへ一台の車が到着。お向かいの一人暮らしの男性Sさんの息子さんが父親を心配して迎えに来たとのこと。「私の工場は御船（みふね）にあるけどもうメチャクチャです。ドーンと下から押し上げられてドーンと落とされて恐ろしかったです。道路は段差だらけで車の底をドンドン打ちつけながら来ました」。自宅は私の住む熊本市南区にあるが、とりあえず父親の家

に直行したそうである。父親を車に乗せ、私の方を振り返つて「おばちゃんも一人だから家に来ませんか」と、誘つてくれた。息子さん宅は新しい建物でがっちりしているのが安心だと思つた。

ご家族とリビングで雑魚寝したのだが、ひっきりなしに余震がきて一睡も出来なかつた。次の日の十五日の朝、帰宅して家の周囲を見ると大きな亀裂もなく傾いてもなかつた。

内部は本が落ち茶碗類は割れて散乱していたが家具は倒れることなくやや動いていた。

が、それは間違っていると私が説得役になつて調整したりもした。障がいの者の立場になつて考え、意見を言ってくれるカウンセラーみたいな人が避難所に居てほしいと思つた。早速行政のスタッフに申し込む。しかしそれは結果、弟さんに引き取つて貰うという排除のような形になり残念であつた。

色々な人がいろいろな背景を持ち、皆慰めを求めていること、少しの慰めも嬉しく受け止められることが今回の避難生活で本当によく分かつた。前震から十日目、直方キリスト教会から田中さん、烏田さん、君原さんが支援に駆けつけて下さり、こまごました食品などが届けられた。第三弾の支援である。

避難して二週間近くになると廊下やフロアに居る人達とも顔見知りになり挨拶したりおしゃべりし合うようになった。私は出来るだけ館内を見回つて高齢者に声をかけをするように心がけた。

「大丈夫ですか。困つたことないですか」などなど。なかにはかわいい赤ちゃんもいて、いつも笑顔を振り撒いてくれ苦難の中、ふと安らげる

ひとときもあつた。館内でのろんな人達と話し合うと家が半壊以上壊れて住めない人、断水が続いて生活できない人など気の毒な人が多くおられることが分かつた。又、酸素吸入をしながら避難している人、その人を介護している人など、皆大変な事情を抱えながら悲観せずに一生懸命この状況に耐えていた。私の場合は一部損壊で停電・断水も復旧したが、自宅で一人暮らしのは余震が続く中怖くて避難を続けていた。私のように帰宅するのが怖い人も結構いたようである。

しかし、もう大丈夫だと帰宅する人、他の避難所が閉鎖されて移ってくる人と出入りは日々変動していた。私は二ヶ月になろうとしていた六月十一日に避難所を後にしていた。

この苦難のなか九州教区の働きは目覚ましく信徒だけでなく被災者に大きな慰めと勇気を与えてくれた。どんな苦しい時でも神はそばにいて下さること、信徒の絆は強く結びあれていることを実感し、深い感謝の日々が過ごせたことを嬉しく思いたい。